

氏名	浪花 美穂子
学位の種類	博士（社会福祉学）
学位記番号	甲第 60 号
学位記授与の日付	2015 年 3 月 13 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	認知症高齢者ケアにおける生活の安定への変容過程に関わるなじみの検討
論文審査委員	審査委員長 佐藤 久夫 審査委員 中島 健一 審査委員 児玉 桂子 審査委員 後藤 隆 審査委員 手島 陸久

【論文要旨】

認知症高齢者ケアにおける生活の安定への変容過程に関わるなじみの検討

日本社会事業大学大学院社会福祉学研究科博士後期課程

浪花 美穂子

本研究の目的は、認知症高齢者ケアにおいて重要とされる「なじみ」と「生活の安定」の概念の関連性を明らかにすることである。

質問紙調査では、1,263カ所の介護施設の介護職員を対象に、介護職員が認識する認知症高齢者の「不安定な状態」「安定した状態」「安定した要因」「本人の内面の変化」の状態像について自由記述で回答を求めた。分析には、計量テキスト分析および内容分析を用いた。形態素解析の結果から、「人と関わる」という経験が安定するための要因として重要であると示された。内容分析の結果から、認知症高齢者が安定する要因として18のコアカテゴリーを抽出した。特に〈本人を尊重した関わり〉や〈他者との関わり〉といったコアカテゴリーが安定により有用であることが明らかとなった。また、安定の要因のひとつである〈他者との関わり〉を構成する「なじみの人との関係」の重要性が明らかになった。

さらに、介護職員3名を対象にインタビュー調査を実施し、認知症高齢者が施設で安定するまでの心理的変容の過程を「なじみの人間関係」に焦点をあて明らかにした。分析には、TEM(Trajectory Equifinality Model:複線径路・等至性モデル)を用いた。TEMによる可視化により、たとえ重度の認知症であってもなじみの人間関係が形成されることで、「他者への気遣い」がみられるなど「自己と他者との関係性」が拡大するという変容が存在することが示された。さらに、「なじみ」には2通りあることがわかった。1つ目は、自宅で形成したなじみを施設生活の中で新たに発展させる「なじみ」である。2つ目は、施設利用に伴い新たに形成する「なじみ」である。

本研究により、認知症高齢者ケアにおいては、この2通りの「なじみ」を意識したケアが本人の安定に有用であることが示唆された。

Abstract

Examination of Familiarity related to Transformation Process to Stability of Life in Dementia Elderly Care

Mihoko NANIWA

Objective

The purpose of this study was to grasp relations between "Familiarity " and "Stability of Life," which are regarded as important in dementia elderly care.

Methods

1) The questionnaire survey

The questionnaire survey was conducted targeting the care staff of 1,236 nursing homes. I requested the care staff to answer by free answer method, with respect to "Unstable State" "Stable State" "Factor of Stability" "Internal Change of the Person" of the dementia elderlies which the care staff recognized. I used the quantitative content analysis and the content analysis for analysis.

2) The interview survey

The interview survey was conducted targeting three care staff. I clarified the process of the psychological changes of the dementia elderlies until he/she becomes stability visible at the nursing home, focusing on "Familiar Human Relations". I used TEM (Trajectory Equifinality Model) for analysis.

Results

1) The results of the questionnaire survey

I received the answers from 199 care staff. (response rate: 15.7%)

From the results of the morphological analysis, it is indicated that the experience of "Involved with Others" is important as a factor to become stable. From the results of the contents analysis of "Factor of Stability", I extracted 18 core categories as a stabilizing factor for the dementia elderlies. It is clear that especially the core categories such as <Relationship Respecting the Person> and <Relation with Others> are effective for "Stability of Life".

Furthermore, based on the results of the content analysis, I guess "Familiarity" was at the important as "Relation with Familiar Person", which constituted <Relation with Others>, one of the factors of stability.

2) The results of the interview survey

It was found that by forming "Familiar Human Relations", even with dementia, having consideration toward others and expand "relations between self and others".

Discussion

This study showed that there are two types of "Familiarity." The first "Familiarity" is to be formed at home and then developed further in the nursing home. The second one is to be newly formed after having entered in the nursing home.

In the dementia elderly care, it is suggested that the care with consciousness of these two "Familiarity" is effective for "Stability of Life" of the dementia elderly.

Conclusion

From this study, it is indicated that the care with consciousness of "Familiarity" is effective for "Stability of Life" of the dementia elderly. That is, it is considered to lead to the stabilization that the care staff is proactively involved in the dementia elderlies with consciousness of "Familiarity".

【審査結果の要旨】

1 審査委員の構成と審査の経過

博士論文審査は、日本社会事業大学大学院学則、同学位規定及び同博士後期課程修了細則に基づき、第3次予備審査及び最終審査から成り立っている。審査委員は、社会福祉学研究科委員会にて選任された大学院担当の専任教員5名が担当した。5名の氏名と専門分野は以下のとおりである。

審査委員長	佐藤 久夫	障害福祉
審査委員	中島 健一	高齢者福祉 心理学
審査委員	児玉 桂子	福祉環境論 生活環境学
審査委員	後藤 隆	社会福祉調査 社会学
審査委員	手島 陸久	医療ソーシャルワーク

2014年10月31日までに提出された第3次予備審査博士論文について審査委員がそれぞれ精読し、11月28日の公開口述試験を受けて、各審査委員の指摘事項を審査委員長がとりまとめ1月22日までの修正を認め、審査委員会は指摘事項に対応した論文の提出を受けて審査を行い、5名の審査委員全員が第3次予備審査の評価を合格とし、審査委員会においての合格が了承された。次いで、2月5日までに最終審査及び最終試験の申請がなされ、審査委員会は、提出された本論文は博士（社会福祉学）の学位を授与するにふさわしいとの結論に達し、審査委員5名連名による「博士論文最終審査及び最終試験結果報告書」が作成され、2015年2月18日の社会福祉学研究科委員会に審査結果を提案し了承・議決を得た。本学は、これらの手続きを経て、2015年3月13日に「博士(社会福祉学)」の学位を与えることとした。

2 博士論文の評価

認知症高齢者がグループホームや特別養護老人ホームなどに生活の場を移行する場合、一般に新しい環境に慣れ、なじみ、心理的にも安定するプロセスを経るが、通常介護担当者は、高齢者が新しい環境に「なじめるように」という視点や目的意識でこのプロセスの支援に当たっている。「なじむ」「なじみ」はこのようにキーとなる視点・概念であり、しばしば話題となる言葉であるが、安定に至るプロセスの中で具体的にどのような役割を果たしているのか、なじめるようにするための支援として意識的にはどのような方法が活用されているのか、実証的な研究はほとんどなされていない。この点を明らかにすることによって「なじみ」の概念をより意識的・計画的に活用することが出来るようになり、より効果的な支援方法の開発につながると考えられる。本研究は、こうした課題意識のもとに、まず文献レビューに基づいて仮説的モデルを形成し、それをふまえて介護職員に対する質問紙調査とインタビュー調査を行い、そのデータを計量テキスト分析、内容分析等の方法を用いて分析し、総合的に考察したものである。その結果、安定に関連するいろいろなカテゴリーが抽出され、その中でとくに「人とのなじみ」が注目され、その対人関係のプロセスが「他者への信頼」や「他者に対する目的的選別・主体性の芽生え」などを基準として3つの時期に区分される可能性があることを仮説的に示した。さらに、新しい分析方法

の積極的な採用、BPSDなどのネガティブな面の研究ではなく行動の安定というポジティブな研究である点、広くなされているが曖昧な実践を可視化する研究であり、汎用性の高い実践の科学化の研究であること、なども本研究の特徴である。以上のように、研究の社会的意義、研究方法の適切性・実証性、知見の新しさ、論述の展開などの諸点から見て十分に博士論文としての水準に達していると高く評価できる。なお、現状のままで十分な水準に達しているのではあるが、論述の明確さ、分析方法の整理、「なじみ」及び関連概念の取り扱いの整理、等の点での若干の改善の余地があるとの指摘もあり、今後の学術誌等への投稿の際には参考にすることが望まれる。

3 最終試験の結果

本研究は、現場実践で活用されているものの科学的な検証がなされていない「なじみ」の概念に焦点を当て、この概念を支援技術の向上に生かそうという課題意識のもとに取り組み、文献レビューに基づいて仮説的モデルを形成し、それをふまえて介護職員に対する質問紙調査とインタビュー調査を行い、そのデータを計量テキスト分析、内容分析等を行い、総合的に考察している。その結果、安定に関連する色々なカテゴリーを抽出し、その中でとくに「人とのなじみ」が注目され、対人関係のプロセスが他者への信頼や目的的選別・主体性の芽生えなどを基準として3つの時期に区分される可能性があることを仮説的に示している。多くの海外論文を先行研究レビューと調査結果の考察で活用しており、英語力についても十分であり、支援現場の実践課題を把握する能力、幅広い文献レビューを行う能力、新しい分析方法を積極的に援用し抽象的な世界を可視化する能力、論文が示す豊かな学識など博士（社会福祉学）の研究者としてふさわしい者と判断する。